慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

2022年 医学部新年祝賀式開催

ポストコロナを見据えて 社中一丸で粘り強く前進

医学部では、毎年新春を迎えて、教職員および三四会員による新年祝賀式を開催しています。今年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、1月5日（水）に、関係者のみ、マスクを常時着用するなどの感染防止対策を徹底して開催されました。式典の様子は、慶應義塾大学病院2号館11階の大会議室よりZOOMウェビナーにて生配信いたしました。

慶應義塾大学と親交の深い学校法人北里研究所から、小林弘祐理事長を来賓として迎え、冒頭に金井隆典医学部長が年頭の詞を述べ、伊藤公平塾長、小林弘祐北里研究所理事長、武田純三三四会会長、松本守雄病院長、佐谷秀行医学部教授（教職員代表）からそれぞれ賀詞が述べられました。

また、昨年に引き続き、新型コロナウイルス変異種が急速に拡大する中で診療、研究、教育に従事する教職員に対して感謝の気持ちが伝えられました。2022年は、ポストコロナも見据えつつ、ウィズコロナでの新たな慶應医学の在り方を模索し、慶應義塾社中一丸で粘り強く前進することが述べられました。

新年祝賀式と併せて「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく慶應医学賞 ライジング・スター賞授賞式が行われ、自然科学研究機構生理学研究所特任准教授の丸山健太君（87回）と慶應義塾大学医学部坂口光洋記念講座（オルガノイド医学）助教の杉本真也君（88回）の2名が受賞されました。

慶應医学賞 ライジング・スター賞受賞者（左から）金井隆典医学部長、杉本真也君、伊藤公平塾長、丸山健太君、久保田義顕医学研究奨励事業委員長　撮影・石戸　晋

伊藤公平塾長によるご挨拶

式典の様子はウェビナーで配信された

宮脇　敦史君（66回） 日本学士院賞受賞

理化学研究所の宮脇敦史君（66回）が、第111回日本学士院賞を「生命現象の時空間制御の解明を目指したバイオイメージング技術の開発研究」に関する多大なる功績により受賞した。宮脇君は、現在、脳神経科学研究センター細胞機能探索技術研究チーム、光量子工学研究センター生命工学技術研究チームで、チームリーダーを務める。

日本学士院賞とは、日本学士院が授与する1948年創設の賞であり、1911年創設の帝国学士院賞を前進としている。日本の学術賞としては最も権威ある賞であり、毎年9件以内が受賞となる。慶應義塾大学医学部関係者の歴代受賞者は、1927年加藤元一氏が「神経に於ける不減衰伝導に関する研究」で、1975年富田恒男氏が「網膜における情報処理機構の研究」で、2009年御子柴克彦氏が「細胞内カルシウム制御機構の研究」で受賞しており、宮脇君が4人目となる。

宮脇君は、2020年慶應医学賞も受賞しており、その業績を改めてここで重複して紹介することは避けることとする。宮脇君の本日のバイオイメージング技術第一人者としての原点は、北里図書館にある。1984年、慶應義塾大学医学部の学生だった宮脇君は、遺伝子の転写調節機構に興味を抱いて図書館で文献を漁りながら、FRET（蛍光共鳴エネルギー移動）の総説に出会う。まだ誰もFRETを生物学に応用していない時代に、それ以後、その運命的な出会いの思いを持ち続け、具現化する場を求め続けていた。そして、1994年の夏、千載一遇とも言えるチャンスが到来する。蛍光イメージングの創始者と呼ばれ、当時の雲の上の存在であったロジャー・ツェーン博士（2004年慶應医学賞、2008年ノーベル化学賞）が、学会後空港に向かうバスに乗り込む参加者の列で並んでいるのを見つけ、宮脇君は、ツェーン博士の背後にひょいと回りこむ。そのバスの中で3時間半ツェーン博士と1対1で議論する機会を得た。いつもは疎ましきボストン周囲の渋滞が愛おしく思えた程であったと。このひとつの出会いがきっかけとなり、その後ツェーン研に留学し、世界で初めてFRETを利用した蛍光カルシウムプローブ・カメレオンを開発することになる。

偉大な研究業績の影に、人としての情熱と思いがある。宮脇君の今後益々の活躍が期待される。

（天谷雅行　64回）

第17回 白衣式

臨床研修に向けて 大切な第一歩を踏み出す

去る1月8日、令和3年度白衣式が北里講堂にて挙行された。今年は北里講堂に103回生が一堂に会し、感染予防の観点から保護者はオンライン中継を観る形式となった。白衣式は、臨床実習に進む医学生がプロフェッショナリズムを意識する式典であり、米国コロンビア大学で始まり、本塾では2006年から執り行われてきた。

式典には金井隆典医学部長、松本守雄病院長、武田純三三四会会長らが列席し、臨床実習を控えた103回生112名に祝辞を送った。

金井医学部長は、自身の入院時に医療関係者の優しい言葉に触れた経験を踏まえ、患者さん・患者さんの家族の側に立って診療できる医師になることの大切さを説いた。そして、この医師像の達成のために必要な人間力は、厳しい学業の中でも忘れずに養っていって欲しいと激励した。

松本病院長は、慶應病院の理念の一つである「患者さんに優しく患者さんに信頼される患者さん中心の医療を行います」の実践には、患者さんに寄り添う心、また負担の少ない治療法を選択できる知識が必要であり、実習でこれらを身につけ、慶應病院が長年培ってきた信頼を繋いでいって欲しいと期待を込めた。

武田三四会会長は、プロフェッショナリズムの追求に終点はなく、「理を極めよ」という福澤先生の言葉通り、これからの医師人生で多くを学び、医師としてのあり方を考え続けて欲しいと激励した。なお、三四会からは記念品として印鑑付きボールペンが贈呈された。

その後、今までお世話になった先生方からのメッセージビデオ（103回生制作）が放映され、懐かしい顔ぶれに多くの学生が頬を緩めた。

今年は接触を避けるために先生方から学生一人ひとりへの白衣授与は行われず、各々が座席の上に予め置かれていた白衣を、合図と共に一斉に着用した。その後学生代表3名による誓いの言葉の唱和がなされた。誓いの言葉とは、有志により組織された白衣式委員会を中心に103回生全員が協力し、数ヶ月をかけて考えられたものである。

最後に、門川俊明医学教育統轄センター長が閉会の辞を述べた。白衣を着用する者の義務として、実習では医療者として見られている自覚を持って行動すべきであること、また、コロナ禍においても学生が出来る限り活躍できるよう、教育統轄センターとしてサポートすることを述べた。

自身の名が刻まれた新しい白衣に袖を通し、共に学び切磋琢磨する仲間と、喜びと決意を分かち合う本式典に、103回生一同での参加が実現したことは非常に感慨深く、感謝の念に堪えない。

103回生一人一人の思いが込められた誓いの言葉からは、目の前の患者さんのわずかな声も見逃さずに真のニーズを理解し共感すること、最善の医療を実現するために知識と技術の修得に尽力するという信念が表れている。誓いの言葉を深く心に刻み、社会を先導する医療者を目指して日々全力で励んでいきたい。

（4年　佐野英子、銭映美）

白衣式に臨んだ103回生たちの集合写真

今年は自ら白衣に袖を通した

「誓いの言葉」を読み上げる

103回生 誓いの言葉

私たち１０３回生は、
一流の知識と技術を得るべく
日々全力で研鑽を積むこと、
患者さんの「病」だけでなく
「人」と向き合い続けること、
未来の医療を支える
プロフェッショナルとして
協調しつつも切磋琢磨することを
ここに誓います。

第27回
慶應医学賞
候補者推薦募集
推薦締切日：2022年3月6日(日)
THE KEIO MEDICAL SCIENCE PRIZE
本年は臨床医学（創薬・医療機器開発を含む）分野を対象とします
過去の受賞者　＊臨床年
1996　Stanley B. Prusiner, 中西重忠
1997　Robert A. Weinberg, 谷口維紹
1998　M. Judah Folkman, 御子柴克彦
1999　Elizabeth H. Blackburn, 吉川信也
2000　Arnold J. Levine, 中村祐輔
2001　Tony Hunter, 竹市雅俊
2002＊　Barry J. Marshall, 田中紘一
2003　Ronald M. Evans, 宮下保司
2004　Roger Y. Tsien
2005　藤吉好則
2006　Thomas A. Steitz
2007＊　Brian J. Druker, 満屋裕明
2008　Fred H. Gage, 坂口志文
2009　Jeffrey M. Friedman, 寒川賢治
2010　Jules A. Hoffmann, 審良静男
2011　Philip A. Beachy, 田中啓二
2012＊　Steven A. Rosenberg, 間野博行
2013　Victor R. Ambros, 長田重一
2014　Karl Deisseroth, 濱田博司
2015　Jeffrey I. Gordon, 大隅良典
2016　Svante Pääbo, 本庶佑
2017＊　John E. Dick, 小川誠二
2018　Feng Zhang, 柳沢正史
2019　Hans C. Clevers, 岸本忠三
2020　Aviv Regev, 宮脇敦史
2021　Katalin Karikó, 濱木理

慶應医学部初代学部長 北里柴三郎
「破傷風の血清療法確立を記念して」1890年ドイツにて
©学校法人 北里研究所 北里柴三郎記念室
〈審査基準〉　臨床医学の発展に対する多大な貢献
〈推薦方法〉　慶應医学賞ホームページ(下記URL)より推薦フォームへお進み下さい
https://www.ms-fund.keio.ac.jp/prize/
〈副　　賞〉　2名(国内1名、国外1名)に対し、副賞として各1000万円とメダルを授与
慶應義塾医学振興基金
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地
TEL：03-5363-3609　E-mail：k-nomination@adst.keio.ac.jp
https://www.ms-fund.keio.ac.jp

三四会 医学部長 肖像写真を 寄贈

第23代医学部長　天谷雅行（平成29年10月～令和3年7月）

天谷雅行前医学部長の肖像写真を三四会より医学部に寄贈いただきました。

2022年１月５日に武田純三三四会長より贈呈いただき、歴代医学部長の肖像画や写真が飾られている北里記念医学図書館２階の第一会議室に飾らせていただきました。

秘書課長　秦　英作

北里記念医学図書館の第一会議室に飾られた

三四会奨励賞の推薦について

Young Investigator Award, Keio University School of Medicine
Alumni Association（Sanshikai）

目的　若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　１．次の各分野ですぐれた業績をあげた三四会正会員で三四会員として少なくとも１年は経過している者（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績をあげている三四会員も含む）
対象となる分野
イ、臨床医学　　ロ、基礎医学
２．満40歳以下

推薦方法
- 推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
- 推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
- 推薦締切りは2022年４月15日（金）必着、三四会事務局宛とします。
- 提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、論文別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、オリジナル１部とコピー10セットが必要です。
- 対象となる研究が共著論文の場合は共著者の承諾書（オリジナル１部とコピー10部）が必要となります。

※推薦状、略歴、論文、共著者の承諾書を順に組んで1部とし、コピーも同じ体裁に整えてください。
※推薦状のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL：http://www.sanshikai.jp/award/shourei/index.html

選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、受賞者を決定します。受賞者は2022年６月11日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

三四会社会功労賞の推薦について

目的　地域社会、社会貢献を通じて顕著な功績により三四会の名誉を高めた三四会員を表彰し実学としての慶應医学の発展を図る。

対象　１．表彰目的に沿った優れた業績をあげた三四会正会員（本塾関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域で業績をあげている三四会員も含む）
２．年齢は問わない。

推薦方法
１．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および他大学教授（三四会員）とします。
２．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（三四会社会功労賞推薦状）により候補者を推薦してください。
３．締め切りは、2022年4月15日（金）必着、三四会事務局宛とします。
４．提出部数は、推薦状、被推薦者略歴、表彰目的に沿った業績目録、客観的に評価しうる資料等、オリジナル１部とコピー10セットが必要です。
５．以前推薦したが、受賞されなかった方の再推薦も可能です。

※推薦書のダウンロード、必要書類等は下記URLをご覧下さい。
URL: http://www.sanshikai.jp/award/kourousyo/index.html

選考ならびに受賞
三四会長を委員長とする三四会社会功労賞選考委員会による厳正な選考の結果、原則１名の受賞者を決定します。受賞者は2022年６月11日（土）に予定されている三四会定例評議員会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

鑑価知来

コロナ禍で対面によるコミュニケーションが制限されたことで、我々は対面することの意義について再考させられた。医学部の授業や実習の多くがオンラインに変わり、学生たちも新たな選択肢を得たことで対面講義には「対面でしか得られない学び」を求めており、従来のような一方向の講義では満足してもらえない。オンライン授業は、工夫次第では対面よりも効果の高い教育を提供することができる。実際に総合診療科ではオンラインを取り入れたハイブリッド型臨床実習に取り組み、学生からも高い評価を得た。

一方で実地でしか得られない学びを絶やさない工夫も必須である。オンラインにより失われるものの一つとして、学生同士や教師と学生の雑談がある。効率的なオンライン授業の中に雑談のような一見無駄に見える時間や空間を作ることが実は大切なのかもしれない。今後の教員には、オンラインと対面を適切に使い分けるスキルがシビアに求められている。

臨床医としても診療における対面の意義について考えさせられた。待ち時間もなく、自宅に処方箋も届けてもらえる遠隔診療の便利さを知った患者さんたちにとって対面診察の価値は何なのだろうか。オンラインでも問診はできるが、患者さんの歩き方や持ち物など言語外の情報に大きな意義があることが再認識された。対面でしかできないことに身体に触れる診察がある。身体診察はその所見がもたらす医学的意味以外にも、「診てもらえた」という心理的効果や医師患者関係を強化する効果を患者さんにもたらすことが知られている。今後は対面での診察の場面では、対面でしかできないことを心がけた診療を行う必要があるかもしれない。

単純に対面のほうが良いという懐古主義を脱して、今後は様々な場面でオンラインと対面の良さを最大限活かしながら使い分けることが求められるだろう。

（総合診療教育センター　安藤崇之　92回）